

女が強いアメリカで
迷える男たちのバイブルとなった
男が「男」になるための処方箋

今月の太鼓判

ロバート・ブライ著

[アイアン・ジョンの魂] 野中ともよさん

90年代の初めに発売されて以来、ロングセラーを続け、アメリカの男たちのバイブルとなりつつある本がある。ABCにCNN、各テレビ局が特集を組み、ひとつの社会現象にまでなったという『アイアン・ジョンの魂』。翻訳を手がけたニユース・キャスターの野中ともよさんと一緒に、読み解いていってみよう。

●ミスーリ・コロンビア大学大学院でフォート・ジャーナリズムを専攻。帰国後、フリーのジャーナリストに。'92年からテレビ東京「ワールド・ビジネスサテライト」のキャスターを務める

〈大変な時代を生きることになった。今まで通用してきた「男らしさ」なんてものがヨレヨレに擦り切れて、使えものにならない時代になってしまったのだから。……(中略) さあ、それに気づいた男たちよ。男とはいったい、何なのか。どんな生きものなのだろうか。新しいビジョンを探しに出かけようではないか〉

『アイアン・ジョンの魂』は、そんな具合に始まる。著者は、1926年生まれの人、ロバート・ブライ。グリム童話の『鉄のハンズ』(英米では『アイアン・ジョン』)を読んだことがあるだろうか。森の池の底に寝そべっていた毛むくじやらの大男、アイアン・ジョン。男を牢から逃がし一緒に森へと入っていった少年は、その後さまざまな事件に出会うのだが、ブライ氏はこの物語を軸に、男が本当の男になるために必要なことは何かを考えていく。そして言う。現代の男の心の奥底にも、ア

男が自分の中の男性性を目覚めて、解放されないと女も解放されない

イアン・ジョンのような、毛むくじやらの原始巨人が横たわっているんだと。

「この本がアメリカで大ベストセラーになったのは、社会が飢えていたあるところに解答を与えてくれたからだと思います。」

87年のブラック・マンデーで株価がドーンと落ちましたよね。それまでは、アイビリーグを卒業してMBAを取ってウォールストリートで働けば、20代、30代でも何千万、何億という年収が目ざせるというひとつのアメリカン・ドリームがあった。豊かな人生、高収入というのが、社会的な価値基準になっていたんです。それが突然、否定されて、『パソコンを一台やるから、すぐ出てくれ』とクビにされる。アイビリーガーたちがコンピュータを抱えてウォールストリートを右往左往している姿が、本当に日常的に見られるわけです。あれだけ勉強して、あれだけ努力してアイデンティティを確立したつもりが、経済が破綻しただけで自己喪失もはなはだしくなる。ウォールストリートで見られる現象は、全国的に広がりますからね。そういう中で、男たちは『俺ってなんなんだ!?』という疑問を突きつけら

れたんでしよう。

解雇や減俸はされなかった人でも、ふと自分の内面に目をやってみれば、何か満たされない。『俺は高給取りだし、女性にもやさしいし、子供にも理解があるつもりだ。だけど、いったい男として俺って何なんだ。何のために生きているんだ!?』と、心のどこかにスコンスコンと穴が開いたような気分が、アメリカの男たちに広がっていた。

そんなときロバート・フライが、やさしく語りかけたわけです。『男がソフトさや女性的側面を身につけたのはいいことだ。でも今はあまりにも、動物としての人間のDNAにすり込まれた気質や、男性性に蓋をしてしまっちゃいけないか。このままじゃ、男も女もお互い不幸になるんだから、もつと解放してあげなければ。立て、男たち!』とね。だから、みんな、食べるように読んだ」

この本に出合えて、気持ちが悪くなった

競って読んだのは、男ばかりではない。



集英社 2200円

「ロバート自身も言っているように、これはフェミニズムに対してアランチを投げかけるものではないんです。男も女も、それぞれがそれぞれの性目覚めて、現代社会っていうものをもう一回編み直していかなくちゃいけないという、非常に大きな問題提起となっている。だからこそ、各テレビ局がドキュメンタリーをつくるような社会現象にもなったし、女たちもすごく読んでるんですね。

私自身も、たくさんそのことを教えられました。私、ずっと『女である自分に甘えたら負けだ』みたいな感覚があって、足かけ10年NHKにいたときも男性と同じタイムテーブルで仕事をしてきたんですね。子供を産んでそれができなくなっただけから、社会的な事件が起こると昔の野中の頭に戻ってしまっただけ、すぐその場に飛んでいきたくなる。子供はかわいいし、『ママはあなたのものよ』と思う一方で、『この子がいなければ

行けるのに』という感覚があるわけですよ。そんなふうになったときにグチャグチャになったときこの本に出合っただけで、『ああ、なんだなんだ、私は女なんだ』と、生命の源から自分へとつながる流れみたいなものが見えてきて、すごく気持ちがラクになった。『湾岸戦争に行くことと、新しい命をつくることは、デイメンション(次元)が違うんだ。同じように考えたら自己破壊になるぞ。今はとにかくこの子と格闘して、その中で仕事欲も満たせる方法を考えよう』と、素直に思えるようになった」

本の中で、フライ氏はこう主張する――「男と女のDNAにおける遺伝的な相違は、3%をわずかに超える程度にすぎない。ところが、その違いは体のすべての細胞にある。この世紀、この時期、男性と女性がとてもに分かち合う97%を目を向け続けることが重要だ。そして、ある者を男性たらしめる3%を強調すること、また大切なことだ」

「男と女の間にももちろん優劣はないわけだけれど、胸の出ている私たちと胸のない彼ら、そのセクシュアルな違いをもう少し認識しないと自分の女性性も相手の男性性も削ぎ落とすことになる。やっぱり、男たちが自分の中のアイアン・ジョンに目覚めて、解放されない限り、女も解放されないんじゃないでしょうか」

心の奥底にアイアン・ジョンが棲んでいる男の本質を見抜いてつき合えるかどうかで、あなたの人生が変わってくるのかもしれない。

BOOKS